

コミュニケーション・アゴラ

司会 黒川 貞生 (東京大学大学院)

コミュニケーション・アゴラでは以下の3人の演者により行なわれた。

1. 「Volleymechanics Mailing List」について
2. アジアにおける日本のバレーボール
～シドニー五輪男子アジア地区予選を通じて～
3. ルールについて

橋本 吉登 (大口東総合病院)

矢島 忠明 (早稲田大学)

矢野 貴美子 (都立明海総合高校)

都澤 凡夫 (筑波大学)

「Volleymechanics Mailing List」について

橋本 吉登 (大口東総合病院)

キーワード：バイオメカニクス, 電子メール,
 メーリングリスト

バレーボール学会のインターネットサービスの一環として「Volleymechanics Mailing List」が1999年4月に開設された。メーリングリストとはインターネット(電子)メールを駆使して、双方向にメールを交換するサービスで、現在、北海道から沖縄まで約20名のバレーボール学会員が登録をしている。内容はバレーボール動作に関するバイオメカニクスの考察で、会員の技術向上、指導力向上につながる知見を考えあうとともに、気軽な意見や質問に対応しながらも、深く、濃い討論がなされている。開設から約1年を経過した現在まで450通を超えるメールが交換されている。メーリングリストとしては画期的な「画像」を添付したメールも多く、視覚に訴える新世代のメーリングリストである。

現在までテーマになった話題を紹介すると

(1) スパイクフォーム

開設時よりのテーマであるスパイク運動のフォームを特に運動軸やスイングアームを中心に話し合っている。野球、テニス、バドミントン等の他の競技などのオーバーハンドスポーツにおけるスイングアームや手首のスナップ動作との比較、類似点を考察して、スパイク動作の解明に迫っている。

(2) バレーボール障害 (特に肩の障害について)

スパイクやサーブで起きる肩の障害をスパイク動作を分析して、受傷原因を考察した。特に肩後面に位置する腱板群は肩のスイングにブレーキをかける「ブレーキング・マッスル」と考えられ、障害に結びつきやすいと思われる。

(3) オーバーハンドパス

オーバーハンドパスにおけるハンドリングでの指の使い方、フォームについて、いろいろなバレーボール指導書や各国のフォームも参考にして考察した。

(4) その他

サーブカット、フロッターサーブ、ジャンプサーブ、アタッキングフォーラム、セッタードリル、「尺屈」ブロック、「股割り」とジャンプ、空手チョップ、解剖「指」「背筋、腹筋」「肩」、POSER 4 (3Dアニメーションソフト)、動画編集 (ビデオキャプチャー)、猫田さんの骨折、恐竜の話、etc.

電子メールといういわば私信を介しての意見交換のために「思いつき」「印象」を自由に述べる事が出来、即時性がある点が最大のメリットである。また、実際の「プレー画像」を使って話し合いをすることはイメージをつかみ易く、議論の発展性に優れている。その分、メール容量が大きくなることはデメリットでもあるが、急速に進みつつある通信環境の整備で改善していくと思われる。

[メーリングリストに登録希望の方、または興味のある方は
 VEV 01105@nifty. ne. jp

の橋本まで電子メールにてご連絡いただければ、折り返し「登録の仕方」のメールをお送りします。]

アジアにおける日本のバレーボール

～シドニー五輪男子アジア地区予選を通じて～

矢島 忠明 (早稲田大学), 河野貴美子 (都立明海総合高校)

キーワード：バレーボール, 五輪, アジア, 新ルール

バレーボールの主な国際大会には、オリンピック、世界選手権、ワールドカップの3大会があるが、そのうち、1998年には世界選手権、そして1999年にはワールドカップがいずれも日本で開催され、世界の高水準のバレーボールを、実際の試合会場や、テレビなどのメディアを通じて身近に観戦する機会が続いた。ところが、サッカーなど最近人気を博しているスポーツに比して、国民の関心が高かったかということ、その大会の重要性の割には盛り上がりに欠けた感がある。それには参加出場した日本チームの成績不振も大きく影響しているのではないだろうか。上記2大会に、日本は開催国ということで出場権を得た。一方、他の出場チームは、各地域における激しい予選を勝ち抜いてきた強豪チームである。結果、日本チームはホームゲームという

有利な環境にありながら、男女共に過去にない最悪の成績に終わり、2000年シドニー五輪への出場権(ワールドカップ3位以内)を獲得することはできなかった。

そしてそのシドニー五輪の出場権獲得をかけた、昨年(1999年)男子アジア地区予選が中国・上海の華東師範大学体育館において、12月27日から29日まで開催された。われわれはこれまで中国のメディアがバレーボールをいかに扱っているかに注目し、本学会誌にも報告してきたが、今回は上に述べた問題意識ももって、そのアジア地区予選の期間、中国を訪れ、中国のバレーボール関係者と新ルールなどについての情報交換、意見交換の機会をもつとともに、実際に上海で五輪予選にかけける日本の戦いぶりをこの目で確かめてきた。

以下、中国滞在中に得られた情報や、試合観戦を通じて得た感想などについて報告し、今後に向けての問題提起としたい。

1. 孫志安氏との懇談(1998年バレーボール学会基調講演演者。もと中国ナショナル男子チーム監督。)
2. シドニー五輪男子アジア地区予選について
 - ①試合内容
 - ②館内の応援
 - ③各国協会の対応
 - ④現地の報道(日本にアナリストへの関心)
3. 祝嘉銘氏との懇談(国際バレーボール連盟技術委員会委員。アジアバレーボール連盟指導委員会会長。中国バレーボール協会副会長。)
4. 上海有線テレビ台男子バレーボール代表チーム
5. アジアのチーム(日本、中国、韓国、台湾)の今後の戦いについて

ルールについて

都澤凡夫(筑波大学)

現在バレーボールのルールには、国際バレーボール連盟が決めた「ラリーポイント制」、「リベロの導入」で定着化しそうな趨勢にあります。

私はこの正月に筑波大学のチームでカナダ遠征へ行きました。カナダ西部のサスカチュワン大学(サスカチュワン)、アルバータ大学(エドモントン)、中央部のヨーク大学(トロント)へ行き試合をしました。

その試合の中で感じたことは、「この人達は国際ルールに振り回されてないな。」ということです。西部の大学リーグは5セットマッチではなく、5セット全て25点でゲームをするのです。サーブのネットインは今でもミスです。国際ルールとは全然違います。5-0、4-1で勝てば3ポイント、3-2で勝てば2ポイント、2-3で負ければ1ポイント、1-4、0-5で負ければポイントは0です。強化という観点からすると合理的であると思いました。

翻って、日本のことを考えると、下は中学校のアクエリアスカップからは上はVリーグまで、日本中同じルールでやっているような気がします。

国際ルールは国際バレーボール連盟が主催する大会に適用されるルールです。したがって国内では各カテゴリーにおいて、もっと自由にルールを適用した方が強化につながるのではないのでしょうか。

例えば、リベロについてですが、大学でもリベロを採用しています。身長の高いプレーヤーはサーブレシーブもレシーブもするチャンスを失っています。自分のチームを強化するということでは、問題は起きません。しかしその将来では、間違いなく問題になります。上のレベルでプレーするとき、身長の大きな選手達がサーブレシーブができない(したことがない)、レシーブができない(したことがない)では、大きなプレーヤーを使えなくしているに等しいのです。現実にVリーグでもサーブレシーブができるプレーヤーが少なくなっています。

普及と強化に矛盾が生じているといえるでしょう。各カテゴリーが独自のルールで、「国際ルールに振り回されてない」バレーボールをすることを提案いたします。



コミュニケーション・アゴラの「熱のこもった討論」